

堀川の修景 一風景のパッチワークによる川見の更新手法一

指導教員 加茂 紀和子 教授

浅井 健矢

1. 研究背景・目的

日本では、年々増大している水害に備え、強固な土木を築いている。それは、安全性と引き換えに都市と水辺の障壁となり、人と水辺との関係を失わせてしまう恐れがある。

計画地として選定した名古屋市堀川は、名古屋城の築城に際し、城下町を整備するための資材運搬の経路として 1610 年に掘削された。江戸時代から水運の主軸として栄えることで、川沿いに人々が集まり文化を形成していた(図1)。戦後も材木業としての賑わいがあった(図2)。しかし、戦後の高度経済成長期の工業化により川は汚染され、水運から自動車輸送といったインフラシステムの移行により、堀川はもはや都市の表側ではなくなっている。現在、図3のように、防災・治水のために護岸整備が進められているが、旧護岸の上に重なるように高い堤防が建設され、川と街を分断させ川辺の風景や風情が失われつつある。

本研究の目的は、土木事業と折り合いをつけながら、新しい人の眼差しを堀川に向け、人の居場所として再編する将来像を提案するものである。堀川の現地調査・分析を行い、堀川沿いに対象敷地を設定し、再構の提示を試みる。

2. 堀川の潜在力調査・分析

調査範囲は、護岸に隣接した敷地に建物や私有地があることで、川に対する人々の行為や建築の多様性が見られる都心部の中流域(朝日橋～住吉橋)の約 5.5km を選定する。調査を進めると、住民や行政の様々な行為が堀川沿いの空間を作り出しており、川との関わりが建築形態の特徴として現れ、川への意識を助長しているように感じる。

現地調査として実際に堀川沿いを歩き、川へと意識が向くと感じた場所の写真を撮影した(図4)。写真をヒューマンスケール(アイレベル視点)と都市スケール(俯瞰的視点)の二つの視点から構成要素を抽出し、それらを分析することで、設計に展開するための基礎をつくる。

2-1. 「川見のかけら」「川利のかた」

ヒューマンスケールの川との関わり方を「川見のかけら」、都市スケールの川との関わり方を「川利のかた」と名付ける。全ての写真の中から、川との関わり方が顕著に現れている 89 枚の写真について、データシートを作成し(図5)、その中から、9つの「川

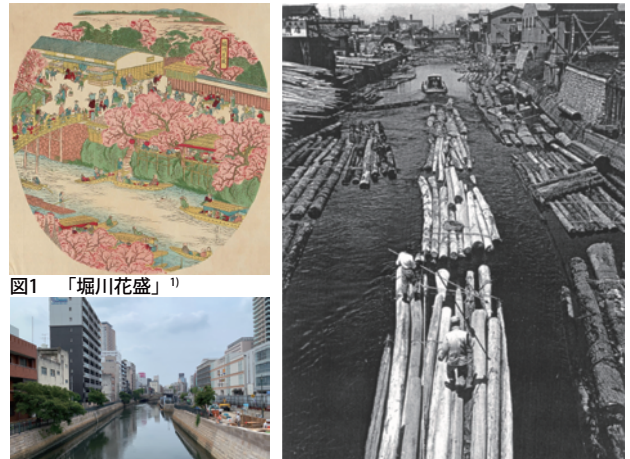


図1 「堀川花盛」¹⁾

図3 無機質な護岸整備

図2 水運時代の堀川²⁾

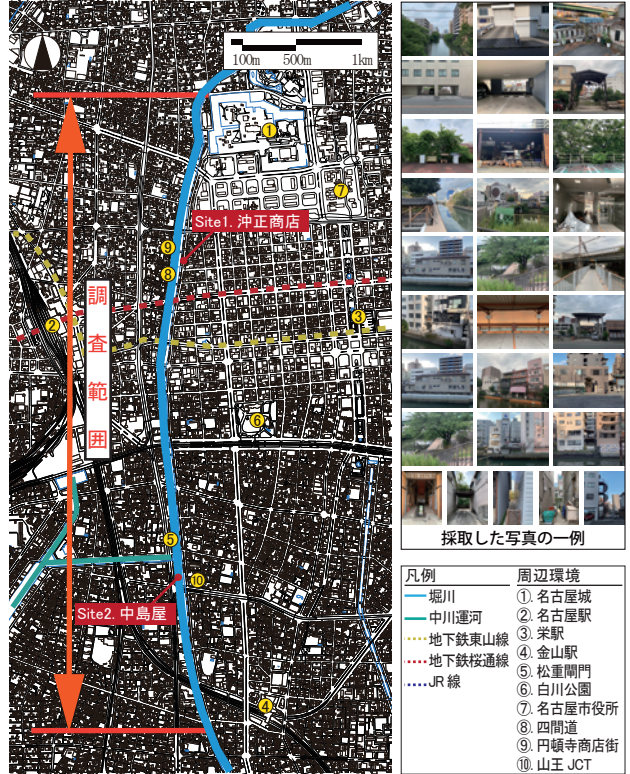


図4 調査範囲・採取例

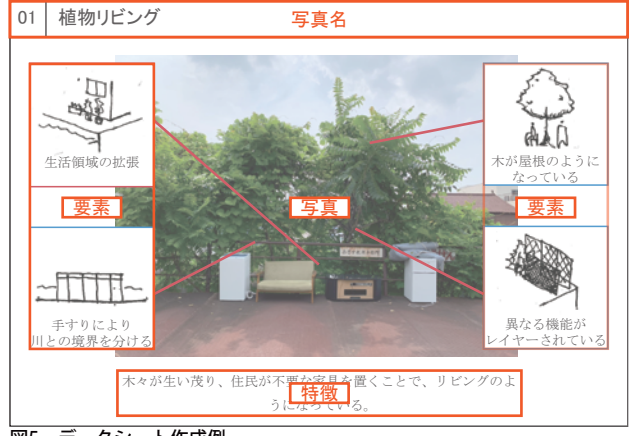


図5 データシート作成例

見のかけら」と12つの「川利のかた」を抽出した(図6)。これらの構成要素の組み合わせが、現在の堀川の景観を形づくっているといえ、残存する堀川の魅力のエレメントであると考えられる。そこには均質でないことでの活力が存在し、堀川再生の可能性を感じた。それらを再編することが、堀川らしい人の居場所の再構築に繋がると考える。

そこで、水運の時代の産業遺構を持ち、現在も材木業を営む2つの企業の土地と社屋を対象として選定し、人の居場所として再編を試みる。さらに現代の堀川ではほとんど機能が失われている「船」という水運のアイテムの提案も行う。

2-2. 対象敷地 - 沖正商店・中島屋 -

対象の2つの敷地の実測調査を行い、企業へのヒアリングにより現状把握を行った(図9)。

Site1の沖正商店(材木屋)には、水運時代に川から木材を荷揚げするための階段が残っており、3m材置き場は地下1階、4m材置き場は1階というように、階高がそれに合わせて作られている。スケールの異なる空間が積層され、断面に特徴が現れる。

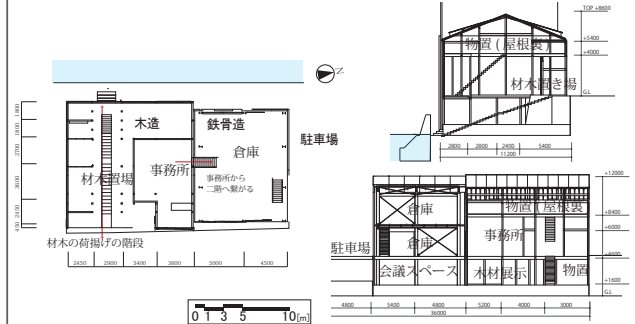
Site2の中島屋(製材場)は、土木用の杭や規格外の製材を行ってきたが、外国材の普及により注文は減少し、現在は木製のパレットの製造が主な業務である。製材場ならではの大き構とそこにかかる屋根は内外を曖昧に繋げ、おおらかな空間をつくる。

3. 計画について

3-1. 提案 - かけら・かたを用いた更新 -

川沿いをリニアに調査することで導き出されたかけらとかたを用いて、二つの対象敷地でコンバージョン計画を行う(図7)。「川見のかけら」は空間のしつらえや動線計画に関与し、「川利のかた」は建築形態に関与する。それらの関係性を構築しながら設計を行い、多様な川見空間を創出する(図8)。

Site1. 株式会社沖正商店社屋



潜在力	問題点
<ul style="list-style-type: none"> かつて川から材木を荷揚げしていた階段 建物の内部にある400年前の護岸 木造・鉄骨造・駐車場という建物配置 道路側に開いたエントランス 	<ul style="list-style-type: none"> 新護岸により川への抜けが失われる 地下空間の活用が不明 エントランスから見える空間が暗い 道路整備によりトラック輸送も困難

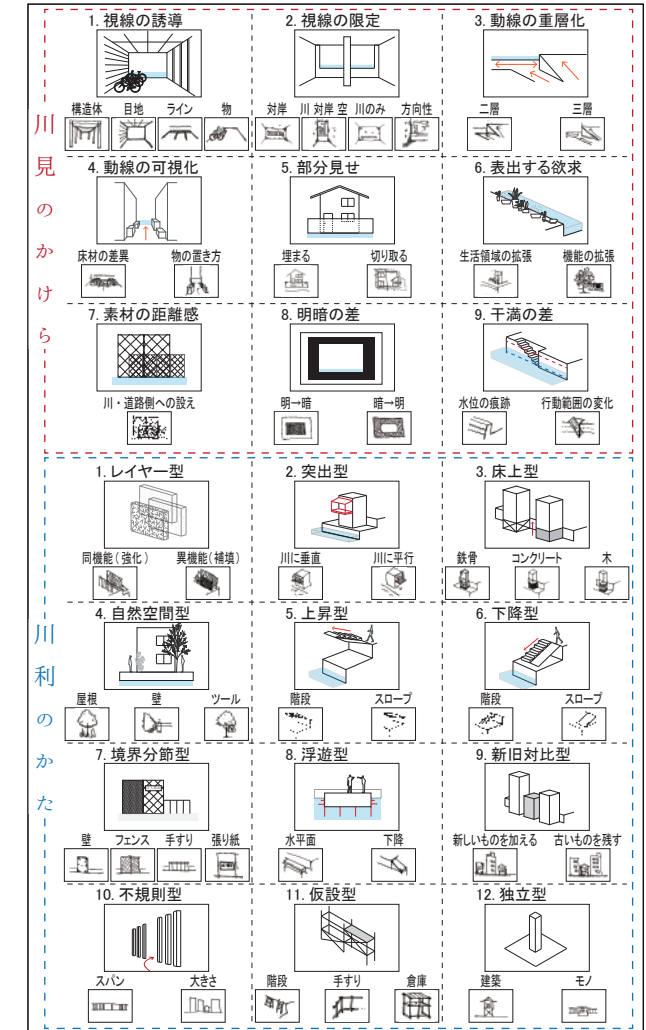


図6 かけら・かたの類型化

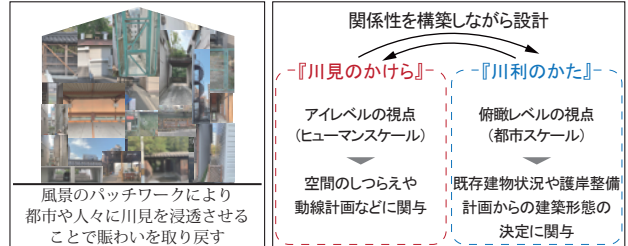
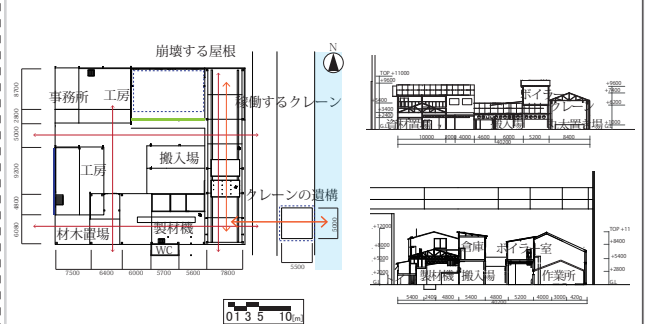


図7 コンセプトダイアグラム 図8 カケラを応用した設計手法

Site2. 株式会社中島屋社屋



潜在力	問題点
<ul style="list-style-type: none"> 井桁状の主動線となる水平ヴォイド 東側にある稼働しているクレーン 製材機の滑車が設置された半地下 	<ul style="list-style-type: none"> 経年劣化による屋根が崩壊している箇所 建構と化した川沿いのクレーン 西側道路に面した壁面が内外を分断している



図9 既存建物の寸法・構成把握

3-2. プログラム

Site1 の沖正商店は、円頓寺商店街や四間道の対岸に位置し、オフィス街に面している。敷地面積も比較的小規模で、栄地区にも近いことから、主にレンタルスペースとして機能させ、短期的に空間を利用することで、川見文化を取得していく場とする。

Site2 の中島屋周辺には、小学校、スーパー銭湯、ジムなど住むために必要な用途の建物や、マンション、一軒家が多くレジデンスエリアである。敷地面積も大きいため、暮らす中で長期的な川見の作法を取得していく場とする(図10)。

3-3. 設計

case1 : 沖正商店

新護岸によって都市と川との分断が起こる敷地に対し、構造補強を行いながら川沿いへと人々を誘導する。隣地の駐車場などに増築することで川見空間を増やすとともに、空地利用のサンプルとして街ゆく人々へのアピールとなり、より市民が主体となったまちづくりへと繋がることを望む(図12)。

case2 : 中島屋

製材場の大きな空間を活かし、共有空間を配置することで、多様な空間性と関わり方を創出する。産業遺構のクレーンを足場船の上架機能として復活させ、堀川への軸線を創出し、建築内の主要動線をそこへと繋げる。多世代が集まることで、堀川を介したコミュニティが地域に広がることを望む(図13)。

水運アイテム : 足場船

満潮時に橋を通過でき、多様なニーズや護岸に応答するようにフロートの上に足場を組む形態の船を設計する(図11)。イベント時には中島屋の集積場に並び、多様な活動の受け皿となり、沖正商店の張り出したデッキ沿いに停留することで川を向いたステージ空間を創出したりすることを想定する。

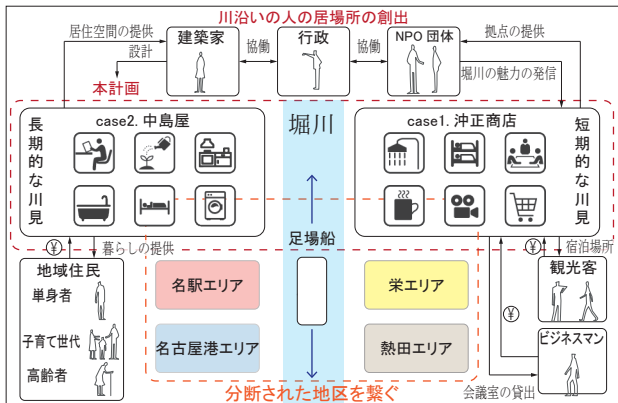


図10 事業スキーム

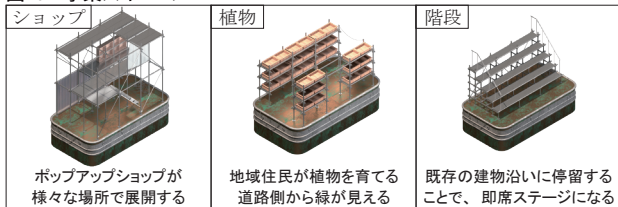


図11 足場船一例

Case1. 沖正商店

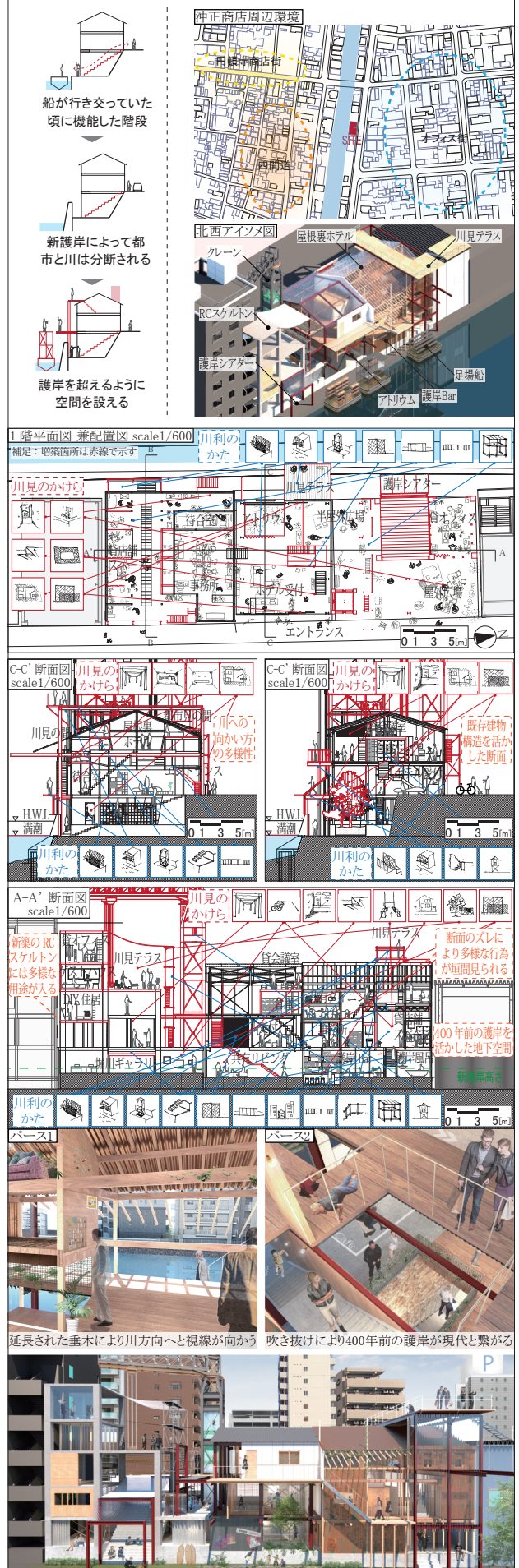


図12 case1(沖正商店)設計図面

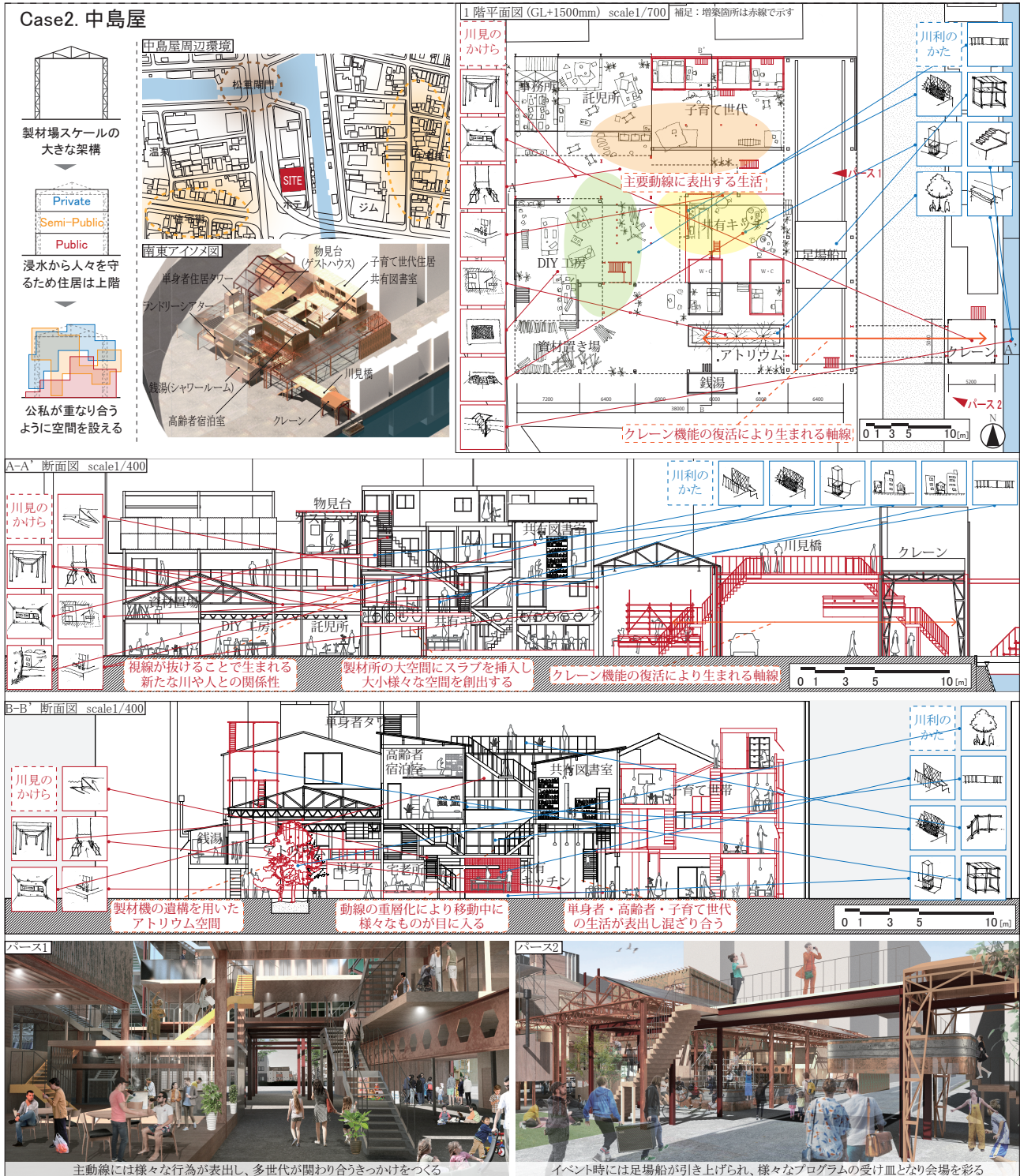


図13 case2(中島屋)設計図面

4. 結論

堀川では水運や川沿い利用の意識が高まりつつあるが、護岸という土木の障壁は越えられていない。建築によって物理的及び心理的にその障壁を越える、新たな川との関わり方と手法を提示した。本計画をきっかけに、川沿いのマンションの様態替えや遊歩道の整備など、様々なスケールで「川見のかけら」「川利のかた」が使われる未来を想定している。

【注および参考文献】1)「堀川花盛」名古屋名所団扇絵、名古屋市博物館所蔵 2)寺西二郎:変貌-名古屋の昭和を撮る 寺西二郎写真集、KTC中央出版、1999. 3)名古屋市緑政土木局:堀川標準断面図 4)名古屋市緑政土木局:堀川まちづくり構想、<https://www.city.nagoya.jp/ryokuseidoboku/cmsfiles/contents/0000041/41296/machikousou01.pdf>,2012.10 5)名古屋市緑政土木局:堀川圏域河川整備計画、<https://www.city.nagoya.jp/ryokuseidoboku/cmsfiles/contents/0000016/16988/horikawaseibikeikaku.pdf>,2010.10

